

---

## 社会性と宗教性あるいは 標準化と最適化もしくは言語と体験

伊元 勇 (会員)

やすいさんの新宗連シンポジウム参加報告を聞いた〔編集部注：本誌10～12頁に資料掲載〕。宗教の復権を模索する、という内容だと受け取った。宗教性を担保するものは何か、が私のテーマのひとつだから興味深く拝聴し、また現代の宗教団体の模索もまた分からないわけではなく、普通では知りようもない世界だけに聞いていてそれなりに面白かったが、そこで引用される現代日本の世相やブーム、世代継承問題や若者の置かれた状況は何も宗教団体だけの問題ではない。ただそれなりの特殊な世界の世俗的事情であっても、やはりそれなりの宗教的本質が見え隠れして興味深かった。

およそ日本において宗教団体のもつ社会的機能は歴史になりつつあり、昔から比べると大きく様変わりし期待され得ないまま衰退しているかのようでもある。個々の団体では興隆する団体もあるだろうし、縁のある人には大いに感謝し期待されるという、本来の宗教が持つ社会的機能が果たされているケースも十分に想像できる。概観すれば従来の歴史宗教の担っていた機

能が順に新宗教、新新宗教とつながり、日本の高度成長期以降、特に60年代からは従来にない価値を求める機運が興隆し、宗教であってもその中で革新していくグループの誕生や、非宗教であって精神性を高める何らかのアプローチや科学・習俗であっても先進性を見つけられ感じられるものに自分を仮託していくことが、自分(真実)探しの方法とされた。精神世界とか現在のスピリチュアルブームにつながるきわめて多様で多くのものが生まれて消滅もし、変容もしている。

私自身若年より漠とした確信を持ち続け、ブームをあまり意識することなく渦中に入りさまざまな体験し当惑し疑い内的彷徨や文献解釈の妥当性を考え、その感官解釈と意味付けにおいて「言語化(他表現)に努力する」ことが肝要であると思いついた。当事者として日常の実践も行っている。少数であるが良質なデータ文献もあり、その他の歯牙にもかからないほどの雑多な本が多くある。それでも一滴のリアリティを感じ取るべく渉獵している。対象分野からして検証困

難で大法螺であるとされる内容の本に慣れたせい最近では絶句する内容は少なくなった。その世界を知るために私自身の社会的規範を相対化してきたせいであると思える。その私から見てもこの分野は玉石混交である。石も多いが玉もまた確かにある。本にしる人にしる私は判断保留のまま、まず知り聞き入ることをモットーにして、そこで感じ取るものの正体を自分の中に顕現すべく努力しそれを言葉にしようと努めている。よって肯定的ながら批判的方法を援用しがちで、それを理解されることもあるが、どちらかという誤解され忌避されることも多い。そんな現実を知ることが人へのアプローチとして大事と思っている。これは言わば人間学であろう。

昨今のスピリチュアルブームを困ったことだ、となぜ問題視するのが私にはもひとつよく分からない。確かにオウム真理教の事件など宗教性が絡む社会的事件が目につく。事あるごとに宗教性の持つネガティブな面が強調され、同じ文脈でメディアは報道し市民の反応もまた同じだという主張がなされる。その指摘自体はもっともなことであるが、宗教の持つ一面だけが強調されるようにもよく感じられる。世界的にみても宗教的突出を許さないとする日本の偏りは事件のたびに、非科学的なものの否定と啓蒙を声高に言う人ばかりが多く現れる。(何だか最近の右傾化の論陣のように) 押さえつけなければ必ずその反動は膨れ上がるようでそのほうが恐ろしい。スピリチュアルブームが真の原因だろうか。個々にはそのようなこともあるかもしれない。歴史以前からの精神世界は啓蒙だけで解決できる訳なく、人類はそのエネルギーを実りある昇華へ導く様々な方法を編み出す文化を持っていた。だから現代ではその意味限定でほっとけばいいのと思う。ましてや細木数子や江原啓介のテレビ番組はバラエティ扱いで社会的に悪い影響力が本当にあると思うなら出演さなければいい大阪哲学学校通信 No.38

ではないかと思う。視聴者はおもしろくなければ観ないし、公共物の電波などつまらないことを言うよりも、いわばだまされテクニックを学んだらとさえ思う。

議論とか話し合いとかはまず同じ土俵に上がり取り組み合いをおこなうが、言語表現にすぐれた哲学学校会員諸氏ではなく言語表現できない、しきれない普通の人が実践体験する世界であり、十分な議論や批判に耐えることがそもそも期待できないし、するべきでないとは私は考える。(その点大阪哲学学校は稀有な存在であるが) 私自身その分野を代表する立場にすらなれず、せいぜい限定的報告者の域は出ないと思っている。もとより議論以前である体験実践者の聞き取りにさえ困難さを伴う現実を直視しなければならない。何でも話し合ったら解決する、とか知性の問題に収斂しがちであるから、およそ科学とは何か、言語化されたものしか知性としないう姿勢態度のほうが私にはむしろ非知性を感じる。必要なことは五感を通じた身体知を過小評価すべきでない。例えば芸術には言語にはない表現があり、身体への直接的方法が私たちに提示される。美しいものをなぜ美しいと感じるか。詩人は巧みに言語の両義的価値(五感を通じる価値と抽象の価値)をあやつる天才であろう。脳に振り回される現代では身体が疎外されているから、オルタナティブな社会を目指すということはすなわち身体性の復権を意味する。歴史的にも例えば明恵による道元批判はそこに通じ、さまざまなタントリズムが生まれる必然性もまた故なしとしない。

シニシズムは排他性と権威主義を体現する社会的手段であり、真摯な学究態度とは相対する。自らを知性の権威とみなし、せいぜい自分で考えることが必要などとのたまわる。立証責任がどうだとか、再現性を要求すること自体、いわゆる科学の効用と限界を知らない考えたことも

無いとしか私には思えない。宗教であっても哲学があり理論化できることがある。科学は当然理論であるし反証可能性は大事である。(抽象ゆえに応用が「適切ならば」多くの価値をもたらすが)しかし破廉恥なほど自説をひっくり返す科学者もいる。それはつまり理論ゆえであるからだ。

「・・・に騙されて……」と自らの修辞ではなく、単に人に対していう輩もいる。聞けば大して調べもしないで、貶めるための貶めに過ぎないことが多い。自らの無知をワンフレーズですり替えていると見透かされることに思いが至らないのだろうか。(・・・はマルクスでもキリストでもよい)科学者でさえのようなことがあるのに多少幼稚な理屈を、それはニセ科学だよ、としたり顔で啓蒙する態度に対し、言わないまでの不信感を持つのが普通の生活者の体験披瀝である。通常、神秘主義者もまた言葉を多く持たない。言葉の効用と限界を知ってるからだ。神秘主義者のほうがよほど誠実である、はニーチェをしてツアラトウストラに言わしめた言葉である。不信顔の市民を一瞥する科学者には、社会的抽象のみが価値であり人間性にはない。

最近「毎日新聞」において、科学と非科学のテーマで学者と高校教諭と科学フリーライターの座談会記事があり、自分で考えること、と大きな見出しがあった。そこで指摘していることはなぜ非科学を信じるかを盛んに論じていた。「水の伝言」という写真集では良い言葉が良い水の結晶を作り出すとしている。個々の問題はきりが無いので詳細には立ち入らないが、科学者が極めて厳密な制御が必要な結晶生成技術に携わっていることは確かで、意識的捏造の可能性を除くと追試すべき価値はあると思う。(なんだか最近の病腎臓移植問題のようだ)個人的にはこのようなことを学校の授業でするべきでないと思う。否定するのもその根拠が確かでない限りどうかと思う。社会化とは標準化のことであ

り、その時その時の標準を設定すべきで、個人にとっての最適化とはギャップがあるとする判断があるなら埋めるべく手段は必要であろう。(それを用意するのが国家なのか教師なのか生徒なのか親なのかよく分からないが)誹謗するのも賛同するのも私には同じように思える。(脱線して敷衍すれば言語もまた標準化そのものであるが)どちらにしてもあやしい。あやしいことはしかしおもしろい。明確な教育を期待する親なら一人ずつ怒り出すだろう。(学級崩壊は受ける方にもあるかもしれない)現代は最適化と標準化のせめぎあいが先鋭化しすぎ、みんな疲れている。許容とか寛容の深い意味がもっと問われてもよい。

吉本隆明はとくに気功がなぜ効くのか、どうしてもわからないが自ら経験して効くことは認めざるを得ないので自分の考えを修正した、という。彼をしてやっこのような素朴な感想を語らしめることは、その世界の社会的認知の困難さを示し、同時に相対する言論人の社会的限界を示唆しているかも知れない。私は諸氏に無いものねだりをするつもりは毛頭ございません。どうぞご安心ください。

【会員短信】ご無沙汰しています。晴れがましいのですが、8月からイギリスの大学で精神障害を勉強しています。難しくても量も多いので悲鳴です。どこまで続けられるかわかりませんが、できるだけことはしたいと思っています。年をとった生徒や外国人は多いのでその点は気楽です。ダンディーというスコットランドの小さな市で、生活はとてものんびりしています。小さな大学なので哲学科も哲学クラブもなく残念です。ただ精神障害の研究の中にはこの病氣と創造力との関係を実存主義と結びつける人もいて面白いです。また哲学学校に参加できることを楽しみにしています。(目賀田文子 2006.12.30)

## 『論座』 四月号 特集 「ぐっとくる左翼」 から

松尾 猛省 (会員)

『丸山真男』をひっぱたきたい』赤木智弘  
への応答を読んで

この発端は本誌一月号の『現代の貧困』特集で赤木智弘氏(フリーター 31歳 希望は戦争)の反響でそれぞれの識者の応答があり、興味深く受けとめ読んだ。

一月号の特集「現代の貧困」を読みポストバブル時代の落とし子というべきフリーターの存在とその現状はその深刻さを物語っている。

ローストジェネレーションについては、新年会の席で山本晴義氏(校長)も朝日新聞の連載記事をもとにその深刻さを話されていたが、また、国会でも格差問題を焦点に派遣労働者の非正規労働者や、パート労働の正規社員との格差問題の論戦が野党から追及されていたが、いまやいざなぎ景気のもとに、富めるものと、その恩恵に預かれない貧困層との格差は益々その度合いを深める傾向にあるのが現代の特徴である。本誌に掲載のそれぞれの寄稿を読むにつけ、今のフリーターの置かれている現状がつぶさに読みとれる。まずはその要旨を取り上げてみよう。

四月号「ぐっとくる左翼」特集の冒頭で雨宮処凛氏はフリーターの現状をつぶさに述べている。

バブル崩壊後の長い不況で若者には「働くこと」そのものが崩壊し、いちどフリーターになってしまうと、もうそこからはなかなか脱出できない。フリーターを積極的に採用の企業は1,6パーセント。運よく正社員になったとしても、10人分の仕事を三人でこなすような職場で、過労死、過労自殺も減る気配のない現状である。

またその一方で、働かない若者は「ニート」「ひ

きこもり」の罵声を浴びるが、その裏には若者のやる気のなさでなく、労働力の使い捨てのうまみを手放したくない企業の要請であることは明白だが、彼らの怒りは社会には向けられずに、「自己責任」という言葉に縛られた内向の形で自分を責めて、自らの命を絶つ傾向も後を絶たない深刻さもある。

本稿のタイトルは『「貧乏」を逆手に反撃が始まった』であるが、働き場もなく、やり場のない若者たちは今、高円寺一帯の商店街で『素人の乱』を結成、リサイクルショップや古着屋、カフェなど五店舗を経営する。素人カフェは、昼はカフェ、夜はバー、カフェの革命ランチは350円、コーヒーは200円なるほど貧乏人に優しい価額、でこうなったらまっとうな人生など蹴散らし、貧乏人の大反乱しかないとの開き直りである。

01年に貧乏人新聞の刊行宣言、03年「クリスマス粉碎集会」、06年には「家賃をタダにしろ一揆」を決行、その論旨は「家賃が高すぎる、日々数百円のめしに苦しんでいるのに、なんで家賃が数万円もするのか、こうなったら一揆しかない」いま、高円寺で様々な試みを実行し、支持を受けているのが、「貧乏人大反乱集団」だ。

つぎに「ストリートが左翼を取り返す」毛利嘉孝氏はひからびた左翼から生き生きとした左翼を取り戻せと主張している。伝統的な左翼の試みの敗北と戦略の破綻で左翼という言葉は大衆の支持を喪失してしまったと述べている。

その理由に、産業構造の変化でマルクス主義的な「階級」の概念の変容で、既存の労働組合の活動主体だった正規雇用者は今やサービスや情

報、金融などの新しい産業が中心になるにつれて、既得権益の受益者になってしまった。かつての労働者やプロレタリアの代わりに搾取の対象になっているのは、非正規労働者、パートタイムや派遣社員、フリーターやニートと一括されている若者層、主婦、そして学生である。

この流動的で新しい「階級」に対して代弁する機能を伝統的な左翼はもつことができず、それどころか、左翼の支持基盤は、新しい、より厳しく搾取された「階級」の敵になってしまったというもの。なるほど、一面的にはと思う反面、総合的に見れば、従来の労働組合の主体はあくまでも正規社員、正規労働者を対象に闘争、置いてきぼりにされたのが上記の非正規労働者、その他のフリーターということが言えよう。

そして、そのやり場のないフリーターたちの結集が高円寺の「素人の乱」というわけである。その新しい動きをラディカル、レフト、ラフター(R L L)と称し、注目する毛利氏。

私は親元に寄生して自分一人の身を養えない生活

さて、本題の「丸山真男をひっぱたきたい」にもどろう。

「私は親元に寄生して自分一人の身を養えない生活を十数年つづけている。自分がフリーターであることは耐え難い屈辱である。月給は十万円強。実家ゆえに何とかなるが、できれば東京で安いアパートでもと思うが今の経済状態ではかなわない。

「就職して働けばいいでは」というが、まともな就職先は新卒のエントリーシートしか受け付けず、ハローワークの求人は派遣の工員や使い捨てる営業職など安定の職業とは遠いものばかりだ。ポストバブル世代の多くはこれからも屈辱を味わい生きていくことだろう。

平和な社会を目指すという一見良識的なスローガンはその実、社会の歪みをポストバブル世代に押しつけ、経済成長世代にのみ都合のい

い社会の達成を目指しているように思えてならない。このどうしようもない不平等感がポストバブル世代の弱者、若者たちが向かう先のひとつが「右傾化」として見ている。

確かに、右傾化する若者たちの行動と、彼等が得る利益は反するように思える。たとえば、一時期のホリエモンブームなどは、貧困層に属する若者たちが富裕層を支持するという矛盾に満ちたものだった。だが、私は若者たちの右傾化は決して不可解なことではないと思う。極めて単純な話、日本が軍国化し、戦争が起き、たくさんの方が死ねば、日本は流動化する。多くの若者はそれを望んでいるように思える。

我々が低賃金労働者として社会に放り出されてから、もう十年以上たった。それなのに、社会は我々に何の救いの手を差し出さない。平和が続けばこのような不平等が一生続くのだ。そうした閉塞状況を打破し、流動性を生み出してくれるかもしれない何か、その可能性のひとつが戦争である。

識者たちは若者の右傾化を現実逃避の表れと結論づけるが、私たちが欲しているのは、そのような非現実的なものではない。

私のような経済弱者は、窮状から脱し、社会的な地位を得て、家族を養い、一人前の人間としての尊厳を得られる可能性のある社会を求めているのだ、それは人間として当然の要求だろう。

そのために、戦争という手段を用いなければならないのは非常に残念なことであるが、そうした手段を望まねばならないほどに、社会の格差は大きく、かつゆるぎないものになっているのだ。戦争は悲惨だ。しかし、その悲惨さは「持つ者が何かを失う」から悲惨なのであって「何も持ってない」私からすれば、悲惨でもなんでもなく、むしろチャンスとなる。— 反戦平和というスローガンこそが、我々を一生貧困の中に閉じ込める「持つ者」の傲慢であると受けとめられるのである。

社会に出た時期が人間の序列を決める擬似デモクラティックな社会のなかで、一方的にいじめ抜かれる私たちにとっての戦争とは、現状をひっくり返して、「丸山真男」の横っ面をひっぱりたける立場にたてるかもしれないという、正に希望の光なのだ。しかし、それでもと思う。それでもやはり見ず知らずの他人であっても、われわれを見下す連中であっても、彼らが戦争に苦しむさまを見たくない。だからこそ、こうして、訴えている。私を戦争に向かわせないで欲しいと。

しかしそれでも社会が平和の名の下に、私に対し弱者を強制しつつ、私のささやかな幸せへの願望を嘲笑いつづけるのだとしたら、そのとき、私は、「国民全員が苦しむ続ける平等」を望み、それを選択することに躊躇しないだろう。

#### 本稿に対する応答

『自分の横っ面をひっぱたくことだ』

佐高 信 (経済評論家)

この若者の「希望は戦争」を読んでいて不思議でならないのは、戦争により自分が死ぬこと考えてないように見えること。戦争とは他人が死ぬもので自分が死ぬものでないという考えはゲーム感覚がしみこんでいるのか。

日本人はしばしば、「無限責任」を要求して、結局は「責任」を雲散霧消の愚を犯してきた。「個人の責任」と「時代の責任」あるいは「公の責任」と「私の責任」をていねいに腑分けする必要がある。やはり、「どうするか」を考えないものに「どうなるか」はみえてこないということである。

『絶望している場合ではありません』

奥原紀晴 (赤旗編集局長)

希望は戦争というサブタイトルにドキッとしました。でも「いつまでたっても我々は貧困から抜け出すことができない」文章に胸がつぶれる思いで読みました。

今の日本では、若者の二人に一人が派遣やパートアルバイトといった不安定雇用のもとに、そのほとんどが月収10万から15万くらい。この先、給料が上がる見込みはなく、いつ解雇されるか分からない。バブル崩壊後の大企業のリストラで正社員を減らし派遣や請負パートなどへの置き換えの犠牲。君はこの閉塞状況を打破し流動性を生み出すためには戦争しかない。勿論、「私を戦争に向かわせないで欲しい」というのが、結論だから、君の訴えの真剣さは受けとめたいと思います。

君にもうひとつ考えてほしいのは、事態をどう打開するか真剣に考え行動している人たちがいるということです。いま、絶望している場合ではありません。君の思いを受け止めるものがあるしっかり見て、足を踏み出そう。

『フリーターこそが戦争に行かされる』

福島みずほ (社会民主党党首)

1999年、労働者派遣事業法が改悪され、97年から2004年までの小泉政権下までに、正社員が400万減り、パート、派遣、契約社員が400万増えました。格差拡大も非正規雇用者の増加も、政府の規制緩和、政策から生まれています。その政策のもと赤木さんらを見捨ててきたことは事実です。しかし、後半の「戦争は悲惨でも何でもなく、むしろ、チャンスとなる」というのは違うのではないのでしょうか。

現代の戦争は「非対称型」の戦争です。イラクで戦争しているアメリカの本土が大空襲を受けることはありません。ベトナム戦争のように、徴兵制でなく、志願制のもとで、戦争に行くのは、職のない貧しい地域の若者たちです。かつて自民党の前幹事長が「フリーターはサマワへ行け」と発言しました。フリーターこそが戦争へ行かされるのではないのでしょうか。柳沢大臣は女性を「生む機械」と戦時ターゲットにされるのは「フリーター」です。

ひっぱたかれるのは丸山真男でなく、あなた

自身であり、奪われるのはあなたの命であり、あなたの人生です。それでも、戦争の道ですか？

読者の広場より

歴史を繰り返すな

赤木氏は自身の経験をふまえ、安部政権は「再チャレンジ」などというが、我々が欲しいのは安定した職であり、チャレンジなどというギャンプルの機会でない。このような生活弱者の大群が日本に出現していることは社会構造の問題であり、大きな政治問題だ。

生活弱者の代弁の政党はあるのだろうか。立派な議員宿舎に住んでいる政治家にそれが分かるのだろうか。どんな形であれ、歴史を繰り返すようなことがあってはならない。

(神奈川県 M氏 73歳)

この国のリアル

この国のリアルな実情を見た思いがする。「夢」を喪失させられている若者たちの叫びにも似た声が耳に響く思いだった。そんな若者からの報復反応なのか、31歳のフリーターは『丸山真男』をひっぱきたいなどと挑戦的な言葉を吐く。彼は小泉、安部政権は改革と称して格差拡大政策を推し進めたが、でも若者たちはこの政権に好意的だと述べ、戦争により、多くの人が死ねば、日本は流動化し、自分たちにチャンスがめぐってくると語る。

平和による閉塞状態の下では「夢」など持てず、戦争こそその可能性があるかと本気でいう。

それが「美しい国へ」と語る人物や、そのブレン達の本当の狙いだとすれば、この国は間違いなく、憲法改正なる道へと走り出し、ナショナルリズムの機運も加速していくだろう。若者は孤立化している。この現況への危惧ばかり残った。

(京都府 O氏 63歳)

赤木さんの一希望は戦争に対する各氏の応答をそれぞれとりあげた。各氏それぞれの思いを述べ、それに対し私はなんの言葉もないが、そのうちらにあるものと、そうでないものとの隔離はたとえようもなく、その立場の相違で、その苦渋すら味わったことのない者の隔離の差異もある。

ポストバブル世代のフリーターは200万人とも言われ、その若者たちが明日に希望をもてぬまま、10万から15万足らずの低賃金で将来の希望のもてる見通しもない現実こそ問題ではないのかと思う。その若者たちが現実のどうしようもない閉塞状況のなかで、運よく既成社会の軌道に乗り、安逸にわが世の春を謳歌する連中との差異を横目にしながらの「自己責任」の揶揄にも眼をそむけられない若者の心境もあるのではなからうか。

それに対し、佐高氏の「自分の横っ面を叩きだけ」ではその解決の糸口にはならず、やや、同情的な奥原氏「絶望している場合ではありません」と潔いが夢の確証もない。福島氏の「フリーターこそ戦争に」は、それをわが身に引き換えて再考をと促しても、それ故にこそ閉塞状況の流動化をとの思いを本気で、戦争への挑戦を口走る若者達に、果たして、歯応えはあるのか。

それに対して、読者の広場の「歴史は繰り返すな」の寄稿は「生活弱者の大群が日本に出現」それが社会構造と政治の問題と真摯に受け止め、歴史を繰り返すなど。また、「この国のリアル」では閉塞状況のなかの若者達のナショナルリズム、右傾化を危惧している。

なににしても、赤木智弘氏の「希望は戦争」の波紋は大きく、泰平の世を満喫の読者の度肝を抜いた。それもこれも、元をただせば、バブル狂騒時代の負の遺産が造りだし、漸く沈静化したとはいえ、その間、置き去りにされた若者達の大群が、寄り道もない閉塞状況のなかでの、戦争への希求は正に私は、窮鼠猫をも囓むの心境ではないかと受け止めた。

若者の困窮状態は、「やる気」や「努力」ではどうにもならないレベルまで来ている。フリーターの年収は106万円。今のままでは、この層の年収は生涯にわたり変わらない。30代になっても、40代になっても、50代になっても。政府の「再チャレンジ支援プラン」では、

2010年までにフリーターを二割減らすことを目標としているが、あとの八割はどうなるのだろうか。雨宮処凛氏の問いかかけであるが、なににしても、将来を背負う若者達の不安、波紋も大きく、今や放置できない問題ではないかと思ったのである。

《2007年度・開講講座》 4月14日・28日・5月12日 於・尼崎労働福祉会館  
「憲法9条の思想—」・デューイと現在の課題 山本晴義（校長）

哲学市民フォーラム  
2007年度開講講座  
**憲法9条の思想**  
**—」・デューイと**  
**現在の課題**

山本晴義(やまもと・はるよし)  
大阪哲学学校校長/大阪経済大学名誉教授  
2007年 4月14日・4月28日・5月12日  
全3回

大阪哲学学校  
Osaka Independent School of Philosophy since 1986

【講師より】今年1月20日から25日にかけて、アフリカ・ケニアの首都ナイロビで8万人もの人びとが集まって開催された「第7回世界社会フォーラム」の分科会で、世界に日本憲法9条の精神をひろめ、9条の思想をそれぞれの国に定着させていくことを強調されたことが伝えられています。2月には日本全国で多様な草の根運動「9条の会」が6020に達しました。

本年度最初の講座で、私はまず(1)GHQの占領政策の思想的背景、「アメリカ・リベラリズム」「ニューディール」の変遷と日本の労働運動、(2)ソ連・コミンテルンの拡大とスターリン主義普及による社会主義運動の混乱、(3)デューイの「戦争非合法化論」の発展過程、「公共的社会主義論」の今日的意義と問題点、(4)アメリカ「新自由主義」「グローバルズム」の終焉と新しい社会主義運動(陣地戦)への途、という大きなテーマを三回ぐらいにわたって私自身の体験をまじえながら語っていきたくと思っています。

## 大阪哲学学校活動日誌 (「通信」37号発行以降)

- 2007 1. 1. 「大阪哲学学校通信」第37号発行  
1.27. 「新年・会員参加者交流会」  
2.24. 「書かない 書けない 書かさない——今、メディアを考える」…講師・森 潤  
3.10. 「新たな役割を模索する新宗教——新宗連シンポジウムに参加して」  
.....講師・やすいゆたか



# 野辺送りの歌

上野山 定由 (会員)

知人の葬式で

出棺まぢかになって

スピーカーから荘重な音楽が流れてきた

野辺送りの歌だ

私の葬式も ぜひこのようにしたい

いまでさえ耳が遠いのに

これから先さらに遠くなる まして柩のなかでは

せつかくの野辺送りの歌が聞こえてこない

葬式の費用として取っておいたものを

分不相应なハイファイ装置に換えてしまった

朝に夕に野辺送りの歌を聞いている

死んだらお悔やみとして

地球が一分間とまってくれて

私を地球のそとへ 遠くにぽいと放り出す

ふたたび地球が動きだして

予報通り晴れてきましたな

葬式が出せない

献体することにした

後始末は なにもかもしてくれる

一分間がかたづくという訳にはいかない

解剖実習の順番がまわってくるまで

防蝕されて黒ずんだまま ある期間は置いておかれる

そのあいだも 野辺送りの歌を聞かせてもらえないものか

## 【大阪哲学学校（2007.3.10）での配布資料より】

## 新宗連シンポジウムの報告に対するコメント

やすい ゆたか（会員、講師）

光であり愛であり命である、  
そしてあなたである

聖丘に花の光ははかなくも  
命の祈り胸に響けり

コメントを仰せつかりました〈やすいゆたか〉でございます。立命館大学や大阪経済大学で哲学思想関係の講師をしております。哲学というのはやればやるほどわからなくなるもので、私は還暦を過ぎたこの歳になってやっとソクラテスの「無知の知」を実感しております。ソクラテスは結局無知のまま死んでしまいましたが、私はここから生きなければと思っております。というわけで正直宗教について何も分かっておりませんが、でもお話したいことはたくさんあるのです。

中江さん、「生命の尊さ」どう伝えるかということで悩んでおられますね。戦争・環境破壊・家庭崩壊・ゲーム感覚の殺人など生命がガラクタのように扱われています。熊野さんも指摘されておられますが、戦後貧しい時代を体験して。必死に築き上げた資本主義社会が、便利な機械をはじめとする物質的富を積み上げて、それを神にしてしまったのです。でもそこに生命が感じられないのですね。命を削って積み上げたのだけれど、だからほんとうは富は大なる生命の現われのはずなのに、ばらばらに切り離されていて、生命を喪っているのです。富は人間同士を貨幣に還元して支配する商品という疎外された姿になっているのです。

ですから資本主義を放置しておきますと、生

命が吸い取られた冷たい社会になるのは必然的ですし、格差もどんどん拡大して大変なことになるので、政治や文化が介入して、いろいろは正していかなければなりません。そういう意味では宗教の役割は大きいわけです。

資本主義の粗野な唯物論に反発して、宗教は物質万能と対極の精神主義というか、内面的な祈りへと傾きすぎることがあります。そこにやすらぎや救いがあるのでしょうか。でも、物とのかかわりを忘れてしまいますと、実際は生命からの逃避になってしまいます。内面の生命としての祈りは、大いなる生命と繋がるためには、外に物として現れなければならないのです。

「千の風になって」という歌では「私の墓の前で泣かないで下さい。」「千の風になって」「雪になって」「鳥になって」「星になって」と歌われます。

物は実は元来魂であり、神であったわけです。物部氏は武器を<sup>つかさど</sup>ると共に、神を祭っていたわけですね。物とは魂なのです。それが私有され、排他的な富として大いなる生命から切り離されたら、生命のない物として扱われるわけです。

家の近くに富田林のPL教会がありまして、八月一日に世界一の花火が見れるのです。パッと開いて、パッと消える、きれいですよ。それからドーンという音が胸にぶつかってくるのです。命の美しさ、はかなさ、尊さがそれで実感されるわけです。これって宗教の原点でしょう。ついでに近所びいきでPLの宣伝になりますが、PL高校の野球は、すごい感動を作り出してきたのです。命の素晴らしさ尊さを実感させるという意味で大きな役割を果たしています。

生命というものは内面の祈りが外に出てきて形をつくる、それははかなく消え去るものだけれど、生命の現われなら、消えないものを感動としてみんなの心に残すということでしょう。それが歓喜なんです。梅原猛先生は『歓喜する円空』という本を出されましたが、祈りが仏の姿をとって現れるという歓喜ですね、これはすべてのものづくり、芸術、スポーツにも普遍できることです。

つまり物にするというのは実際の物づくりもふくめて何らかのパフォーマンスでもいいわけで、一時はやったような文化祭というような大掛かりのものから、祈りの場に音楽や舞踊の要素を取り込んだり、「フリーハグ」を組み込んだりでもいいわけです。キリスト教会では「主の平和」と呼びかけあって挨拶をしますね。そのとき肩を抱き合うようにするとかでもいいと思います。愛がここにあると実感できれば、それが癒しをもたらします。

### 宗教は阿片ではなく葛の湯か 濁世の毒を解きて癒せよ

ともかく私が言いたいのは、宗教は麻薬では駄目で、解毒剤でないと駄目だということです。つまり現実の社会の生産の場が生命を生む生産をしていないで、生命すなわち魂を殺している、だから教会や寺院で生命を取り戻さなければならぬのです。そのためにはささやかなパフォーマンスでもいいから、一緒に命の感動を生み出す演出が必要なのです。

キリスト教の礼拝は聖餐式といって主イエスを食べる儀式です。パンがイエスの肉、ワインがイエスの血ですが、聖なる命をいただくというのはすぐキリスト教徒には精神的な支えになっていたようですね。これは実はイエスの復活とつながる秘密があるのですが、それはさておき、どの宗教でも食をふるまうということが大切です。布施の原点に、教えと命を与えると

いうことがあると思います。

でも実際には司祭や僧侶が自分の体を食べさせるわけには行かないので、その代わり心づくしの食事を作って与えるということがあれば心が通うと思うのです。これは簡単なようで難しいですよ。もちろん宗教によっていろんなバリエーションが考えられますが、本格的な食事を出す場合があってもいいですし、饅頭一個、煎餅一枚、お茶一服だっていいわけです。でもそれで命をいただいたと思えるものを出そうと思ったら、命がけですよ。

すぐに僧侶や祭司が作らなくても誰かにやらして自分は祈祷が専門みたいに、分業で発想したら駄目ですね。もちろん僧侶・祭司という聖職が必要かどうかは別問題ですが、私が言いたいことは、宗教は社会で失われている命を取り戻す場として、機能しなくてはいけないということです。だから一緒に作って一緒に食べてもいいわけですね。そうすれば家に帰って食事を作る、職場に行って生産やサービスや事務ををするときもそういう思いを忘れないようにということに少しは繋がるわけです。

### 有り難いお説教の言葉より 涙流して共に苦しむ

熊野さんのお話で個々の信者さんの苦悩にどう個別に対応するかということで、悩んでおられますが、とても個々の信者さんの悩みにまで、事細かには、宗教が自らの教義で高踏的に答えを与えられるものではないのじゃないかと存じます。一緒に悩んで、共に歩む「共苦」という立場に立つことです。息子さんに自殺された六十代の方が告白されているのですが、いろんな人に慰めや励ましをもらったがますます苦しくなるだけだったのです、でも藤田友治さんは話を聞いて何も言わずに一緒に泣いてくれ、肩を抱いてくれたそうです。それで自分の気持ち理解してもらえたと思って気持ちが軽く

なっただけです。ちなみに藤田さんは私の最も大切な友でしたが一年半前に手術の失敗で急死されました。

ありがとうその一言で言霊か  
手段の国も目的の国

宗教で魂つまり命を取り戻して、その心を社会生活に還元し、社会に奉仕するというのが大切ですね。それは家庭生活にまた職場での生活に魂を取り戻すということです。

私は母が大好きでした。でも一つだけ批判的に見ていたことがあります。私の母は学校の先生でしたが、物を買ったりしたときは金を払ったのだからといって「ありがとう」と言いませんでした。でも成人してから気づいたのですが、物やサービスの対価でお金を払ったとしても、そのおかげで生きているのですから、「ありがとう」というべきだったのです。「ありがとう」の言葉がなければ、商品と貨幣の関係になってしまい、魂と魂のつながり、命の関係にならないのです。「ありがとう」は命を取り戻す宗教的な祈りの言葉なのです。

また「いただきます」という言葉は「命をいただきます」という意味だという小学生の詩を読んで衝撃を受けたことがあります。大いなる生命の循環の中で、他の命を燃やして、我々は生きているのであり、やがて大いなる命の中に食べられて還るわけです。命をいただいているという自覚の下に食べるということが大切ですね、つい忘れがちですが。そういう言葉の意味を家庭や学校の会話の中で確認しあうということが大切なのです。

魂のすすり泣きする世にありて  
祈りの人よ起ちて歌えや

特に今日の状況では医療や教育や環境や政治の現場に「生命の尊重」「人格の重視」「環境の再生」

「恒久平和の実現」といった「大いなる生命」の「循環と共生」の立場を浸透させなければなりません。そのために宗教が各分野につながりを深めたり、進出されることは大いに期待されます。特に冷戦終焉後は宗教や文化の違いを意識した「文明の衝突」が危惧されております。宗教者が宗教的対話を促進して、恒久平和への道をつける上で大変重要な役割を担っています。一神教同士の近親憎悪に対しても、仏教や神道は第三者の立場からも和解の道を示すことは可能でしょう。もちろん一神教と多神教の宗教的和解というものが対話を通して可能です。光＝愛(慈悲)＝生命を根底において捉えれば、一神教と多神教と仏教は十分相互理解が可能なのはです。すくなくとも激しく憎しみ合うことはなくなるはずです。

そして大いなる生命の現れとしての地球環境の危機に対して共同の取り組みを行うのは、生命の尊重を原理にする宗教者の神聖な義務です。宗教者が、地球環境危機を唯物思想にかぶれた信仰心の欠如にのみ原因を求め、もっぱら説教によって地球環境を守れと高踏的に託宣をたれているだけでは、信頼を築くことはできないでしょう。具体的な車社会からの脱却などの生活改善や、緑化運動や教育研究機関などの組織作りやさまざまな啓蒙運動を率先して行うことが必要です。マルクスは、「哲学者は様々に解釈してきたにすぎない。肝心なのは変革することだ」と既成の哲学者を喝破しましたが、「宗教者」も哲学者の二の舞では困ります。

【編集部注】

本稿は、大阪哲学学校講座「新たな役割を模索する新宗教——新宗連シンポジウムに参加して」で講師のやすいさんが配布された資料です。参加されなかった方のご参考に掲載いたしました。